

軽トラ市の未来を考える 公開シンポジウム

基調講演「軽トラ市の特性と将来展開」

戸田 敏行氏（愛知大学三遠南信地域連携研究センター長）

パネルディスカッション「軽自動車の未来と地域連携からみた軽トラ市」

パネリスト 伊藤 二三男氏（スズキ（株）四輪商品第一部チーフエンジニア課長）

原川 知己氏（三遠南信地域連携ビジョン推進会議事務局長）

峯岸 敏雄氏（一般社団法人全国軽自動車協会連合会管理部企画課長・広報課長）

森 一洋氏（しんしろ軽トラ市のんほいルロットワーキンググループリーダー）

コーディネーター 戸田 敏行氏（愛知大学三遠南信地域連携研究センター長）

日 時：2020年2月15日（土）13：30～17：00

場 所：愛知大学豊橋校舎 本館5階第3・4会議室

はじめに、戸田敏行センター長から「軽トラ市の特性と将来展開」と題した基調講演をおこない、軽トラ市の定義と全国の開催・運営状況、出店者・来場者の状況、軽トラ市の効果、将来展開について紹介した。

続いてのパネルディスカッションでは、前半は4人のパネリストから小講演をいただき、後半にディスカッションをおこなった。

小講演として、森氏からは、「しんしろ軽トラ市のんほいルロット」の10年間の歴史と現状について、補助金獲得や道路使用許可の取得など、立ち上げ時の苦労や成功・継続のためのポイントを紹介いただいた。また、出店者や商店街、来街者の状況や開催後の変化などについても紹介いただいた。峯岸氏からは、軽自動車の歴史と内容、未来像をテーマとして、軽自動車の規格、軽自動車が果たしている社会貢献的役割、国際水準である税負担などについて紹介いただいた。伊藤氏からは、スーパーキャリイを例とした軽自動車の企画・商品化の流れ、軽自動車の将来としてCASE、MaaSなどの技術進化について、軽トラ市と関連付けて紹介いただいた。原川氏からは、三遠南信地域連携ビジョンと軽トラ市への期待について、三遠南信地域連携ビジョン推進会議の設置、組織や体制の取組みの概要を紹介いただいた。

小講演の後は大きく3つのテーマについてディスカッションがおこなわれた。1巡目は、「未来の自動車を活用した新しい軽トラ市、可動商店街への展望」についてである。森氏からは、新しい自動車機能への期待

について、過疎化が進んでいく中で、軽トラ市はイベントを超えて生活に密着しているものの、毎日のものではない。そこで、可動商店街としては、より生活に密着し、買物難民や限界集落の生活応援につながる機能の必要性に関して言及があった。その他、電源供給など、軽トラ市だけにとどまらず、災害時やアウトドアへの活用可能な自動車機能についての提案があった。伊藤氏からは、2017年の東京モーターショーで出店した軽トラ市仕様のスーパーキャリイの開発経緯やそのコンセプトについて、設計・企画の意図も含めて具体的に紹介いただいた。原川氏からは、車の機能や機動性を活かした災害時の物品提供、高校生の授業成果発表の場など教育面での活用についても展開された。また、行政の各種相談など情報提供ツールとしての活用など、食のみならずより広い視点からの発言があった。峯岸氏からは、交通を制御しようとしてバイパスを造った結果、中心だった商店街が寂れてしまった。その対応策として、軽自動車を活用しての地域活性化策がおこなわれていることの意義について触れられた。同時に、軽トラ市は出店者と商店街が一緒に利益を上げて盛り上げていること、そして同じ規格を有する軽自動車での出店のため、きれいに並び、見通しも悪くならないという統一性と景観の観点からの利点が述べられた。

2巡目には、「官民、自動車産業、信金などとの軽トラ市の地域ネットワークの増大と推進」について意見交換がおこなわれた。森氏からは、地域ネットワーク

の期待として、県境に縛られない越境ネットワークづくりが述べられた。越境した相互の出店等を促進するためにも行政の許認可問題の規制緩和と統一の重要性についても指摘があった。また、大学の研究や学生と地域の交流などに対する期待も語られた。伊藤氏からは、自動車企業の視点から、地域がネットワーク化されることにより情報が共有され、次のアクションにつながる。そのための仕掛けとして、軽トラ市によって地域が活性化することで、地域連携が起こることに対する期待が挙げられた。峰岸氏からは、食品営業許可や道路使用などの許認可に関する陳情も視野に入れ、全国軽トラ市でまちづくり団体連絡協議会（以後、軽団連）での連携強化が重要である。そのためにも、商工会連合会なども関与することにより、軽団連の事務局機能の強化が求められているとの指摘があった。原川氏からは、軽トラ市の地域ネットワーク展開として、全国組織の軽団連だけでなく、地域版として三遠南信地域の軽トラ市のネットワーク化をさらに推し進めることの重要性について指摘があった。また、三遠南信地域のネットワーク化が、全国の軽トラ市ネットワークのモデルとなることへの期待も語られた。

最後に3巡目は、「これからの軽トラ市や東京モーターショー2021に向けて」として、期待や今後の抱負などが語られた。伊藤氏からは、CASEやMaaSなどの情報技術を活用することで、軽トラ市がさらに進化し、イノベーションを起こし、新しいものをつくっていくべきである。それにより、人口減少や高齢化社会に対する有効手段になると語られた。峯岸氏からは、出店者、出店品目が多様化することで地域の方も喜び、軽トラ市がさらに盛り上がることにつながる。そのため、軽トラ市同士、出店者同士の横の連携をさらに拡大していくことの重要性が語られた。原川氏からは、軽トラ市を継続して周知・PRを図ることが重要である。それにより、軽トラ市の魅力や必要性を多くの人々が感じ取り、車などの進化やイノベーションが起こることで、更なる全国的な広がりにもつながると語られた。森氏からは、軽トラ市はただ販売するだけでなく、多様な出店形態があるため自己実現にもつながるものである。そのため、今後の軽トラ市はより誰でも気楽にできて自己実現・満足ができるという点を強めるような新たな切り口があるのではないかと提言があった。また、これからは困っている地域で可動商店街として軽トラ市を開催することを、行政が主導して進めていくことの必要性についても指摘があった。そして、東京モ-

ターショーに向けては、2021年の全国軽トラ市を東京モーターショーで開催するという「夢」も語られた。

戸田センター長からは、スズキの鈴木修会長から軽トラ市が日本自動車工業会の中で認められたという発言もあり、2019年の東京モーターショーは活動を拡大するチャンスだった。2021年の東京モーターショーがより軽トラ市の結束と新しい進化の機会になれば、と語られた。

最後に、パネルディスカッションのまとめとしては、1点目に、軽トラ市は運営者や出店者にとって自己実現の場という心の問題であることを押さえておかなければならない。2点目は、CASE、MaaSなどイノベーションをどのように取り込んでいくか。3点目に、最近自動車企業は、企業というより社会をどうつくるかというように範囲をどんどん広げており、新しい公共の在り方も考えられている。その1つの形としての軽トラ市を考えていくことができるのではないかとまとめた。



図1 戸田センター長の基調講演



図2 パネルディスカッションのようす